東北工業大学地域連携センター・研究支援センター紀要 EOS
Vol.33 No.1 p.145 ～ p.150, 2021

令和元年度学内公募研究（地域連携型）
〔研究論文〕

城下町登米まるごと建築博物館プロジェクト

中村　琢巳 [1)]，工藤　汐渚 [2)]

The Ecomuseum Program for the Promotion of Cooperation of Historic Buildings in Castle Town Toyoma

Takumi NAKAMURA [1)], Shio KUDO [2)]

Abstract

This project is concerned with the ecomuseum program for the promotion of cooperation of historic buildings in castle town Toyoma. The feature of the project is the following. At first, by the private historic house museums were opened to the public on the same days, tourists came to visit the whole castle town on foot. Second, this project was the model case for which the private historic house museum are utilized continuously by a university's cooperating.

1　プロジェクトの背景

本研究プロジェクトの対象地は宮城県登米市登米町の中心市街地をなし，武家屋敷や町家，近代洋風建築が織りなす歴史的町並みから，「みやぎの明治村」と称される地域である。筆者たちはこの地域に伝わる歴史的建造物の調査（参考文献１），文化財登録の推進，空き店舗の修復再生（参考文献２および３）といった地域連携プロジェクトに継続して取り組んでいる。

登米市登米町には，重要文化財・登米高等尋常小学校（現・教育資料館）に代表される登米市所有の博物館施設群が点在する。これに対して，個人所有の住宅や歴史的建造物の一部をミュージアムとして定期的に一般公開する，プライベート・ミュージアムが点在することも大きな特色である。まさに，城下町がまるごと建築博物館のような魅力をもつといえよう。

一方で，市所有の博物館施設に比べて，これらプライベート・ミュージアムは現在，多くの課題を抱えている。たとえば個人所有者の負担に委ねられた管理運営の難しさ，所有

1）東北工業大学　建築学部建築学科 准教授
Associate Professor, Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology
2）元 東北工業大学　工学部建築学科 学生
Graduate, Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology

者の高齢化，これらミュージアム群の回遊性の不足といったものが挙げられる。また，こうした民間の歴史的建造物保存活用によるヒストリック・ハウス・ミュージアムについては，海外では数多くの博物館研究やマニュアル本，行政支援プログラムなどが進展しているものの，我が国では研究面でも実践面でも，蓄積の乏しい分野でもある。

こうした背景のもと，点在するミュージアムを楽しみながらめぐり，より城下町全体の回遊性をもたせ，かつプライベート・ミュージアムの持続可能な保存活用策を試みる歴史的建造物の公開イベントを企画・実施する。地域活動に大学生が参画することによって，個人所有のミュージアムの管理運営のサポートをし，それらをネットワーク化する実験的プロジェクトである。なお，まちめぐりを促すターゲットは，観光客にととまらず，子供も視野に入れた。これにより，歴史的建造物の魅力や今後の歴史を活かした地域づくりに，子供たちも関心を抱くような効果も狙う。

２　プロジェクトの概要

登米町の中心地は旧城下町の構成をとどめ，武家屋敷通りと町家が軒を連ねる「蔵造り商店街」が並ぶ。武家屋敷通り側は，水沢県庁記念館や登米懐古館，公開武家屋敷などの市所有博物館施設が密集しており，観光客などが集まりやすい通りである。これに対して，蔵造り商店街は，主に登録有形文化財「海老喜蔵の資料館」や伊新薬局アンティーク資料館などのプライベート・ミュージアム群が立ち並ぶ。これらの施設群は市所有施設群がある武家屋敷通りに比べて，あまり人が足を運ぶことが少ない立地になっている。

以上の立地特性ゆえに，昨年度に筆者たちが取り組んだ修復プロジェクトで展示空間として再生した登録有形文化財「海老喜まちかど館」を核として，点在するプライベート・ミュージアムを学生が一時的に運営・開放し，活用イベントを通して城下町全体に総合的なネットワーク化を持たせることを目的としたプロジェクトを行う。

その概要は，次のとおりである。

活用イベントの開催日時は，2019年10月26日（土），27日（日），11月２日（土），３日（日）の合計４日間とした（10時から16時まで実施）。主催は，東北工業大学・学内公募研究（地域連携型）「城下町登米まるごと建築博物館プロジェクト」として，共催にとよま振興公社，後援に登米市，登米市教育委員会，登米コミュニティエフエム，協力としてみやぎ北上商工会登米支所が参画した。

写真１　武家屋敷通り

写真２　蔵造り商店街

実施場所として，活用イベント案内および景品交換所を，とよま観光物産センターに設置し，後述する人力車の発着場所（水沢県庁記念館・角地）にもサテライト的に受付を設けた。プライベート・ミュージアムとして，「海老喜蔵の資料館」「伊新薬局アンティーク資料館」「町屋ミュージアム菅勘資料館」「宮城芸術文化館」の４館すべてに参画いただいた。さらに，子ども向け企画のワークショップ会場として，昨年度の修復プロジェクトでワークショップ・ルームとしての整備も行った「海老喜まちかど館」を活用した。

「城下町登米まるごと建築博物館プロジェクト」の名称で広報用ポスター・チラシを作成し，登米市教育委員会およびとよま振興公社の協力のもと，関係機関や登米市内の全小中学校への告知を行った。

３　実施内容について

１）歴史資料館６館のスタンプラリー

登米市が所有し，とよま振興公社が管理運営する博物館施設群（歴史資料館６館）の回遊性を一層高めるため，スタンプラリーを企画･実施した。４館以上のスタンプを集めて，最後に遠山之里で景品交換を行う企画とした。スタンプラリーに関係するグッズを本プロジェクトでデザインした。景品交換として用いるオリジナルのイラストをあしらったクリ

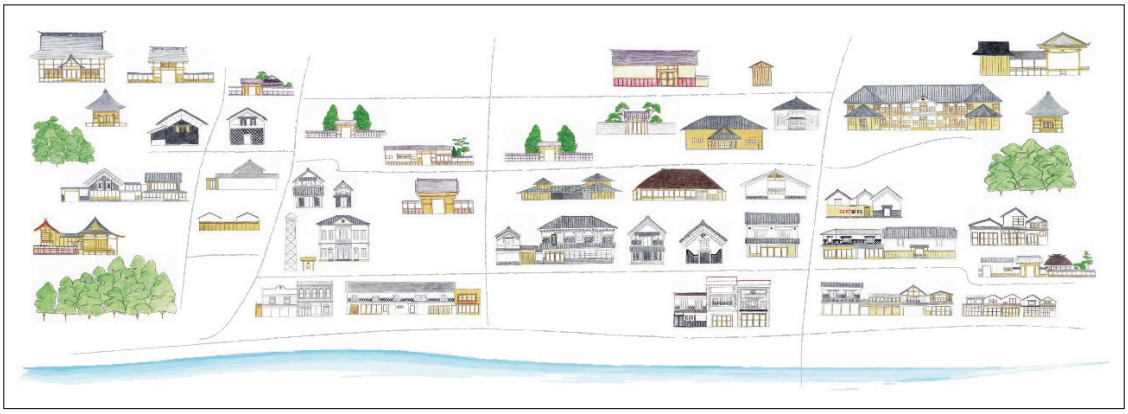

図１　スタンプラリー用にデザインした「たてもの絵図　スタンプラリー帖」マップ面

図２　スタンプラリー表紙

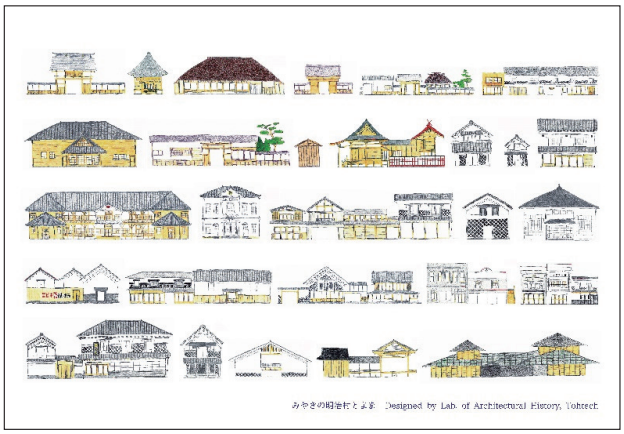

図３　デザインしたポストカードの例

アファイル，ポストカード（３枚セット），エコバックなどである。またスタンプラリー台紙とマップをかねた「たてもの絵図　スタンプラリー帖」を制作し，受付窓口とした遠山之里のほか，各歴史資料館に設置した。

２）プライベート・ミュージアムの一斉公開

海老喜蔵の資料館，アンティーク資料館，菅勘資料館，宮城芸術文化館をプロジェクト期間中の四日間，一斉公開した。アンティーク資料館と菅勘資料館は普段は予約制の個人ミュージアムであり，これらミュージアム群が同日に公開される初めての試みとなった。大学生が待機，案内のサポートに入ることによって，４日間終日の一斉公開を実現するとともに，ミュージアム群の連携化をはかった。また期間中限定で，４館の共通入館券をつくり，ミュージアム巡りの促進を目指した。

３）小学生ワークショップ－城下町の「ミニ屏風」をつくろう

歴史的町並みの保存活用には，地域の子供たちに建築への興味をもってもらうことが重要である。そこで，町並みや歴史的建造物に興味を抱くきっかけづくりのワークショップを企画した。小学生を主な対象として，城下町の建築を描いたオリジナルの「ミニ屏風」を作成するワークショップを登録有形文化財「海老喜まちかど館」で開催した。制作物は記念のお土産として持ち帰ることができるよう工夫した。

写真３　ワークショップの様子

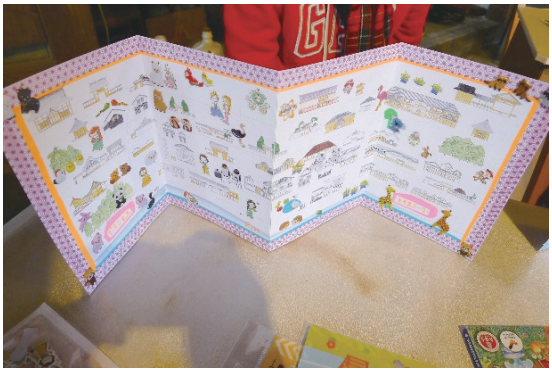

写真４　小学生が制作した成果例

４）大学生による人力車運行

城下町全体の回遊性促進と「みやぎの明治村」の空間的効果を狙い，普段は商工会青年部が催事にあわせて運行している人力車を東北工業大学建築学科の大学生が運行することを試行した。安全を重視し，商工会青年部による事前講習会を学生たちが受講し，万全を期した。また明治村の雰囲気との調和を目指し，車夫と受付担当の和装を試みた。運行ルートは水沢県庁記念館に発着所を設置して，武家屋敷通りを南下して，菅勘資料館の裏手へ回る20分程度のコースを設定した。乗車は，ミュージアム巡りの促進という狙いもあって，プライベート・ミュージアム共通券の購入者に限った。

写真５　人力車発着場に設けた受付

写真６　学生が町並みをガイドする人力車

４　実施結果について

４日間のイベントを実施した結果，以下のような参加状況となった。まず，歴史資料館のスタンプラリーの景品交換者は142名であった。これに対して，プライベート・ミュージアム共通券の購入者は58名で，プライベート・ミュージアム全館入場によるスタンプラリーの景品交換者は24名となった。海老喜まちかど館で実施したこどもワークショップの参加者は13名であった。人力車の乗車人数は26組50名であった。

５　プロジェクトの成果と課題

本プロジェクトの企画・実施を通して，以下のような成果と課題が挙げられる。

まず成果としては，狙い通り，ある程度の城下町全体，そしてミュージアム群の回遊性をうみ出したことである。スタンプラリーの交換は166名があって，普段は連携の少ない市所有博物館群とプライベート・ミュージアムを回遊する人の流れは促進できたと考えられる。ただし，台風の影響もあって，大きな参加者の増加は難しかった。

また，個人で管理運営を行っているプライベート・ミュージアムである菅勘資料館やアンティーク資料館でも，大学生が待機・サポートするかたちで，一斉公開ができる体制を確認することができた。高齢化が進むこの地域にあって，こうした大学・地域のサポートによるプライベート・ミュージアムの保存活用プロジェクトは，今後も継続して実施する計画が必要であり，今回のプロジェクトはそのケーススタディとして位置付けられる。

学生による人力車運行も効果的だった。運行ルートの建築物の解説をまぜて運行するよう工夫し，単なる城下町の演出以上の効果を与えることができた。

一方，今回のプロジェクト実施によって，以下のような課題も確認した。

武家屋敷通りを人力車の運行ルートとしたため，当初目指していた蔵造り商店街へ人の流れを促進する効果はさほどなかった。そのため，次回以降は，より来訪者・見学者の動線を考慮した運行ルートを計画する必要がある。

また参加者の感想によれば，プライベート・ミュージアム，とくにアンティーク資料館の看板・案内板が目につきにくく，場所がわかりにくかったという声が多かった。2020年度に，アンティーク資料館や海老喜蔵の資料館のサイン・デザイン制作を，筆者たちは本プロジェクトの延長で進めており，こうしたわかりにくさは今後，解決しうると考えている。

謝辞

プロジェクト実践にあたり，プライベート・ミュージアムである海老喜，宮城芸術文化館，アンティーク資料館，菅勘資料館をはじめ，とよま振興公社，みやぎ北上商工会登米支所の皆様にお世話となりました。記して感謝申し上げます。

参考文献

1　阿部竜生「登米旧城下町の商家建築」
東北工業大学建築学科中村研究室 2017 年度卒業論文
2　小林愛菜「語らいを生むディスプレイデザイン」
東北工業大学安全安心生活デザイン学科大沼研究室 2018 年度卒業制作
3　中村琢巳・竹内泰・大沼正寛
「旧城下町・登米の歴史的建造物における文化財的価値を醸し出すディスプレー制作」
東北工業大学 地域連携センター・研究支援センター 紀要，32 号・pp77-85，2020.1
4　工藤汐渚「町屋ミュージアムのネットワーク型活用について－みやぎの明治村･登米の実践研究－」
東北工業大学建築学科中村研究室 2019 年度卒業論文